

# Topic-Oriented Writing in the Mixed Class

Yumiko Yoshimura

This paper reports how I tackled to the class of writing in the academic year of 1994. The participants were from eleven countries, and spoke eleven native languages. Some of them had just arrived, and some had already lived in Japan for three and a half years. They also had various backgrounds of Japanese language education.

Using the textbook *Nihongo Sakubun I*, we did oral practice of words and phrases, expressions and sentence patterns, questions and answers, and finally read a sample essay on the topic of each lesson. Each participant was to write his or her own essay after the class and to submit it within five days.

On the fourth lesson the topic of which is “My Country” I corrected all essays and selected four works as the teaching materials for the next class. In the next class each participant received the photocopies of these four works to discuss how different they were. We came to know that there were lots of approaches to one single topic, which widened our intellectual horizon toward writing.

# 混成クラスにおけるトピック中心の作文教育

吉村弓子

## 1. はじめに

日本語の学習者は全世界で増加の一途をたどっており、その年齢、目的、学習形態も多様化している。外国からの留学生を受け入れている本学でも、このような事情を反映して留学生の母語や日本語学習歴がますます多様化している。たとえば、予備教育を全く受けず日本語ゼロの者が入学する一方、母国の中等・高等教育で外国語科目として選択した者、大学卒業後に日系の企業に勤務した者、日本の高等専門学校（以下「高専」）や大学を卒業した者なども少なくない。

本稿は、1994年度の授業実践を報告し、混成クラスにおいてトピック中心の作文教育が効果的であることを述べる。なお、本稿に引用する作文は、学生達の下承を得て転載するものであり、文字・表現等は原文のままである。

## 2. 授業の位置づけ

本学における日本語・日本事情科目の扱いは、カリキュラム改革によって変更された部分もあるが、1994年度当時は学部3年生以上は旧カリキュラムの元に授業が行われていた。旧カリキュラムは、吉村・英（1990）、吉村（1991）に詳しいが、学部生か大学院生かに関わらず、日本語の内容とレベルによって授業を選択できるようになっていた。各授業は週1コマ（75分）開講され、各学期10週ずつ3学期間行われた。作文を扱う授業は初級と中級が用意されていたので、各学生が自分のレベルに合った授業に出席できれば問題はなかったはずである。ところが、同じ時間に開講される他の科目との競合から、中級レベルの学生数名が中級の授業に出席できないという事態になった。作文中級とは別の曜日に開講されていた作文初級の時間帯は出席できるので、初級の授業を履修したいという要望が出された。

日本語の授業は必修科目ではないため、中級レベルの学生の履修を断ることも可能であった。しかし、忙しい工学の学習・研究と並行して日本語も学習したいという学生の意思を尊重し、レベルの異なる学生と一緒に教える方法を工夫することにした。

### 3. 受講者の背景

各受講者の学年、年齢、性別、出身国、母語、在日歴等を一覧表にすれば属性間の相関が見やすくなるのであるが、個人が特定される危険性も高くなる。そこで、ここでは学生のプライバシー保護に配慮し、文章で記述することにする。属性間の相関には最大限気を配り、特筆すべきことがある場合は補足していく。

受講者の合計数は23名で、日本語の授業としては大きなクラスであった。学年別内訳を見ると、学部3年生が5名、大学院修士課程1年生が6名、大学院修士課程2年生が3名で、修士課程2年生の3名を除く計11名が単位を取得した。この他に履修登録をせずに出席した者が9名おり、その内訳は大学院博士課程1年生が2名、研究生が4名、研究者（母国では大学の教師または研究所の研究員）が3名であった。年齢は20代前半から30代後半にまでわたり、性別は、男性19名、女性4名であった。外国語教育を専門とする研究生が1名いたが、他22名の専攻は工学であった。出身地域は、中国が9名、ルーマニアが3名、ベトナムとスリランカが各2名、バングラデシュ、マレーシア、インドネシア、フィリピン、タイ、韓国、シリアが各1名であった。母語は順に、中国語、ルーマニア語、ベトナム語、シンハラ語、ベンガル語、マレー語、インドネシア語、ピリピノ語、タイ語、韓国語、アラビア語であった。日本滞在の年月は、半年未満が5名、半年～1年未満が2名、1年～2年未満が8名、2年～3年未満が3名、3年～4年未満が5名であった。

日本滞在の長さは、必ずしも日本語学習歴の長さを意味しない。国費留学生の場合は、日本滞在よりも受け入れ過程の違いの方が日本語学習歴に反映している。すなわち、高専での受け入れか、学部での受け入れか、大学院での受け入れかということが重要なのである。

滞在の最も長い5名は、もともと高専に受け入れられた学生であった。彼らは、国際学友会で半年の予備教育を受けた後、別々の高専の3年次に編入し、3年間の教育を受けて卒業した後に本学の3年次に編入したのである。本格的な日本語教育について詳しく見ると、初めの半年は5名全員に共通しているが、高専での教育にはばらつきがあった。例えば、国語の時間に留学生だけを対象として日本語の授業を行った学校もあれば、国語の時間は自習で特別なケアのなかった学校もあった。

国費留学生の中に学部で受け入れられた者は全くおらず、大学院で受け入れられた者が11名であった。この場合に注意しなければならないのは、大使館推薦か大学推薦かということである。大使館推薦国費研究留学生は、名古屋大学で半年の予備教育を受け、その後本学で研究生あるいは大学院生として日本語の授業に出席している。ここでは修士課程2年生のうち2名と修士課程1年生のうち1名が該当した。一番問題になるのが大学推薦国費研究留学生である。彼らは、制度上予備教育は全く受けずに研究生として来日し、入学試験を受けて大学院に入学する。ここでは修士課程1年生の1名、2年生の1名、博士課程1年生の2名が、そうだった。この4名は、母国で外国語として日本語を学んだ経験はなく、本学の補講・授業や独習によって初級レベルの日本語を習得したのみであった。専門の研究については、指導教官と英語で意思を疎通することができるため、日本語習得の必要性は低かった。しかしながら、日常生活を円滑に送るために、また、研究室の日本人学生と交流

するために、日本語を習得する熱意は並々ならぬものがあった。

私費留学生と研究者の日本語学習歴は、最も多様である。受講者11名のうち、母国の中等・高等教育で外国語科目として履修した者が1名、他大学の留学生別科で学習した者が1名で、その他9名は本学の補講か独習であった。一般的に本学では中国からの私費研究生・研究者に独習者が多く、来日当座は意思の疎通すら困難な者も少なくないが、専門分野の知識と漢語の理解を頼りに、授業も卒業研究もこなしているようである。

#### 4. 授業の進め方

各学期の初回の授業で以下のようなシラバスを配布し、授業の進め方を確認した。なお、評価基準の素点は、本学全科目に共通する。

講義時間： 金曜 11:20～12:35

講義室： B棟515

対象： 学部3・4年次生，大学院生

教科書： 『日本語作文Ⅰ 身近なトピックによる表現練習』専門教育出版

担当： 吉村弓子

研究室： B棟412 内線418

成績： 講義への出席 20%

作文の提出 80%

期末試験は行わない。

評価： 優 A 80～100点

良 B 65～79点

可 C 55～64点

不可（不合格） D 0～54点

単位： 0.5単位/学期

宿題： 用紙は400字づめ，横書き，B5判の原稿用紙を使うこと。

長さは，原稿用紙1枚以内にまとめること。

次の週の水曜5時までに，吉村の研究室入口にあるメールボックスに提出すること。提出期限を過ぎたものは受け取らない。

つまり，作文を書くこと自体は宿題とし，各自の好きなだけ時間を費やすことができるようにした。授業時間は，提出された作文の講評，クイズ，グループディスカッション，宿題に関する説明やウォームアップ等に活用した。欠席などの理由で宿題の提出が遅れると，講評を聞いた後に作文を書くことが起こりうる。講評を聞く前と後では条件が異なり成績が不公平になるため，期限厳守とした。

## 5. 教科書の特徴

『日本語作文Ⅰ 身近なトピックによる表現練習』(1988)を教科書として選定したのは、1994年1月であった。その時点では初級者のみを対象とした授業を想定したが、中級レベルの学生が混在しても支障がないと判断し、変更は行わなかった。

この教科書の「まえがき」にも記してあるように、本書は次のような特徴を有している。初級を終了した学生を主たる対象とし、作文の基本事項を教えることを目的としている。トピックの間に難易度の違いは無く、適宜選んで利用することができる。45のトピックのそれぞれについて、関連語句、言い回し・文型、関連事項、作文例が示されているため、日本語学習歴の短い学生でも作文を書く準備を十分に行うことができる。

例えば、5月13日に出された課題は第4課「私の国」であったが、教科書は以下のようになっている。

### I. 関連語句

場所 地図 島国 半島～大陸 太平洋 大西洋 形 面積 人口 都市 中心(地) 地方  
火山 自然 気温 湿度 季節 気候 四季 春 夏 秋 冬 台風 つゆ 平野 山 港  
交通 文化 歴史 観光(地) 産業(農/工/水産/商) 業 貿易 輸(出/入) 工場  
会社 資源 関係 独立(する) 発達(する) (むし) あつい さむい すずしい  
あたたかい きびしい おだやか にぎやか (南北/東西)に長い めぐまれる おもに  
さかん ～がつづいている ～とつながりがある ～の近くにある ～のとなりにある  
～にかこまれている ～によって～を受ける ～は～に面している ～がとれる

### II. 言い回し・文型

1. (場所)に(は)<名>が集まっています/きます
  - a. 都市には地方から人がたくさん集まってきます。
  - b. 教室に学生が集まっています。
  - c. 駅のまわりには大きなビルが集まっています。
2. ～(の中)では～がいちばん～
  - a. 日本の山では富士山がいちばん高いです。
  - b. 電車では新幹線が、いちばんはやいです。
  - c. 日本では北にある北海道がいちばんさむいです。
3. <名>は(場所)にあります
  - a. 私の国は日本の西にあります。
  - b. 私の国はアジアの中央にあります。
  - c. カナダはアメリカのとなりにあります。
4. <名>や<名>や<名>など～
  - a. この地方では主に米や麦や野菜などを作っています。

- b. 秋葉原ではテレビやラジオやステレオなどの電気製品が売られています。
- c. 私の国はカナダやアメリカや中南米などの国と貿易しています。

### Ⅲ. 質問

1. あなたの国はどこですか。
2. あなたの国はどこにありますか。
3. あなたの国のまわりにはどんな国がありますか。
4. あなたの国はどんな形をしていますか。あなたの国には海や山がありますか。
5. あなたの国の面積はどのくらいですか。
6. 人口はどのくらいですか。
7. 首都は何という名前ですか。
8. 首都はどこにありますか。首都はどんなところですか。
9. あなたの国の気候はどんな気候ですか。
10. 日本の気候とにていますか。
11. あなたの国では、どんなものがとれますか。
12. あなたの国では、どんなものを作っていますか。
13. あなたの国ではどんな国と貿易していますか。
14. あなたの国ではどんなことばが話されていますか。
15. あなたの国は古い国ですか、新しい国ですか。
16. あなたの国と日本とはどんな関係がありますか。

### Ⅳ. 作文例

私の国はタイです。タイは赤道のすぐ上にありますから、一年中夏で暑いです。タイの季節は雨季と乾季だけで、雨季は6月と7月です。あとは乾季で、一番暑い月は4月です。私の国の近くには、マレーシアやビルマやベトナムなどの国があります。

タイの首都はバンコクで、大都会です。私の国ではことばはタイ語が使われています。タイには田畑が多く、農業が大変さかんです。でも昔は農業が中心でしたが、今は工業がのびてきました。日本の会社や工場もたくさん建てられていますので、タイには日本人がおおぜい住んでいます。ですからタイ人と日本人は、とても仲が良いです。これからも日本とのつながりはどんどん深くなっていくと思います。

### V. ここで習った語句や文型をたくさん使って、あなたも書いてみましょう。(400字)

実際のところ、日本語の学習経験なしに研究生として受け入れられ1年2ヶ月滞在したばかりの学生でも、授業時間に教科書のIからIVを口頭練習すれば、次のような作文を書くことができた。

私の国はルーマニアです。ルーマニアは東ヨーロッパにありますから、季節は四つです。毎年冬に雪が降ります。時々、雪は多いです。私はその白い冬は大好きです。春は暖かくてきれいです。色々な花があります。夏に気温は一番高いです。あと、秋にたくさん雨が降ります。

私の国の南にヨーロッパの一番長い河があります。海や山があります。海は黒海です。山は長くて高くないです(2500メートル)。私の国ではことばはルーマニア語が使われています。国の近くにいろいろな国があるので、たくさん人は外国語を分かります。私の町はハンガリーとセルビアに近いです。ルーマニアで市は大きくないです。国の人口は二千二百万人です。都市に二百万人が住んでいます。他の市はもっと小さいです。私の町は豊橋と同じ大きさです。

## 6. トピックに対するアプローチ

作文の講評としては、文字、表現、文法の間違ひについても取り上げたが、内容に関してディスカッションすることも時々試みた。他の学生の作文を読むことにより、1つのトピックに対して様々な主題の選び方があることを知るのが目的である。

第4課「私の国」の場合を以下に説明していく。このトピックについては、前節に述べたように、5月13日の授業で教科書のIからIVを練習しウォームアップを行った。作文は授業時間外に書かせて18日までに提出させた。20日の授業までに、吉村は添削・採点をすませ、主題の選び方の異なる4作品を選んだ。以下にあげるA～Dが、それであるが、ここでは添削部分を示さず原文のままとする。

### A. 私の国

フィリピンは大小7,107の島々からなり、総面積は約30万km<sup>2</sup>である。日本の北海道を除いた広さに近い。島々は東経117度から126度、北緯4度から20度の中にある。

フィリピンは熱帯性気候に属し、年平均気温は26℃～27℃で、一年を通じての温度差は少ない。雨期は6月～11月で、乾期は12月～5月である。

フィリピンの人口は約6,200万人で、人口増加率は年2.80%である。首都マニラの人口は約800万人で、人口の都市化が増えているが、全体の大部分は農業人口である。

フィリピンでは、英語は広く通じるけれど、公用語はピリピノ語である。

フィリピンの国民全体の93%がキリスト教徒で、82%はローマカトリックである。

政体は共和国で、現在はラモス大統領が就任している。

### B. 私の国

私の国はバングラデシュです。年齢的には私とほぼ同じぐらいです。川と緑の国とも言われています。土地面積は日本の三分の一で人口は日本とほぼ一緒です。しかし、ほとんどは平地でとても住みやすいです。1971年に独立戦争の道を歩んで一つの国として世界地図に現れました。ですから戦争の傷は22年たってもまだまだ残っています。弱い経済はその一つの例です。その前200年もイギリスの植民地でもありました。その前にはかなり豊かな国だったと歴史で学び、おじいさん達にも聞きました。何よりも現在は自由な国であることは幸せだと思えます。古い文化などもきちんと守られているようです。私は国はもともと農業国だったのですが今は第三世界に属されることは事実です。私達の成長と共に私の愛するバングラデシュもっ

ともっと豊かな国、平和な国になれるように頑張りたいと思います。

#### C. 私の国

私の国は「静かな朝の国」ともいう韓国です。日本と一番近いところにある国です。そのため日本の気候とだいたい同じですが、半島の国だから大陸性、海洋性気候の特徴を半分ずつ持っています。今は北朝鮮と韓国で分断されていますが、元元は同一民族、国家でありました。人口は現在、日本の半分ぐらいですが、国土の大きさに比べると多い方です。ことばは漢字も通用されますが、韓国の特有の「ハングル」ということばを使います。

昔から韓国は日本との交流がありまして日本語もかなり知っているひが多いです。私も高校の時、第2外国語として習ったことがあります。しかし極一部の韓国人の中ではまだ過去の歴史的なことをわすれず日本との悪い感情を持っている人もいますが、時代がかわったことを考えると新しい国際的な雰囲気の中で仲良く善意の競争をするのが望ましいと思います。

#### D. 私の国

私の国は中国です。中国は大きな国ですから、地方によって、ちがうことが多くて、面白いと思います。

一つ目は言葉なんです。中国では中国語が使われていますが、北と南に分けられています。北の方は県と県で言葉の発音はちょっとちがうけれども、皆がわかっています。しかし南の言葉は県と県によって全然違うので、勉強しないと、外国と同じように分からないことがあります。

二つ目は気候です。例えば中国の西南に位置する雲南省は季節の差があまりないです。冬には雪が全然降らないし、又夏にとても涼しいですから、夏にもセーターを着るひとたちがいるのはおかしくはありません。でも、東北は冬に最低気温が約マイナス40度ですので、住人たちは風邪をひいているまま外出すると、鼻水があればすぐに氷になるということがあそうです。

三つ目は中華料理のことです。中華料理はあじによって、四つの種類に分けられています。北京料理は北京ダックや餃子など国内ばかりでなく、海外にもよく知られています。上海料理は甘くて、四川料理は辛くて、広東料理には甘いだけじゃなくて、へび、ねずみも材料に使われています。

中国は面積が大きく、歴史がながく、民族も多いので、文化、風習などについて色々な話を書ききれないことがあると思います。

今、中国は発展途中国として、開放されています。私は中国人として、将来は中国はよい国になるという希望を持っています。

A～Dの作文は、氏名の部分をマスキングテープで隠し、受講者の人数分のコピーを作成した。20日の授業でコピーを配布し、吉村が1度音読した。音読は、誤用を定着させないために添削後の文章を採用したが、以下の議論には影響はない。学生を学年や日本語能力が偏らないように5つのグループに分け、次の3点について15分～20分程度ディスカッションをさせた。



- 1) その国のどんな情報がわかったか。
- 2) どんな印象・感想が残ったか。
- 3) A～Dを比べて、それぞれの特徴は何か。

ディスカッションの後、クラス全体で話し合った。Aは、面積、位置、気候、人口、産業、言語、宗教、政治というように、情報が詰まっている、それに比べるとBは、面積、人口の他は、植民と独立の歴史についてしか情報がないという意見が出た。他の意見が出なかったため、他の国の人がこの作文を書くことができるか、という観点から考えさせた。Aは可能であるが、Bは作者の気持ちが含まれているので不可能だという反応があった。Bのほうが「私の」国、という感じが出ているので好きだという感想もあり、一方、客観的な情報を満載したAが趣味に合っているという声もあった。Aは科学者の書いた作文、Bは文学者の書いた作文、と評する学生もいた。どちらが良い文章とはいえ、トピックに対するアプローチの違いであるという結論に落ち着いた。

Cは、位置、気候、人口、言語、歴史についての情報がわかった、タイトルは「私の国」というより「私の国と日本」のほうが相応しいという意見があった。そもそも教科書Ⅲ-16に、「あなたの国と日本とはどんな関係がありますか」という質問があり、Ⅳの作文例にも

日本の会社や工場もたくさん建てられていますので、タイには日本人がおおぜい住んでいます。ですからタイ人と日本人は、とても仲が良いです。これからも日本とのつながりはどんどん深くなっていくと思います。

とある。これは、作文の読み手が日本人教師であることを意識したものと考えられ、読み手を想定して主題や表現を工夫することは重要であると指摘しておいた。主題として、韓国と日本の歴史を選んだわけである。表現に関する工夫としては、Aの「総面積は約30万km<sup>2</sup>」に比べると、補足説明の「日本の北海道を除いた広さに近い」のほうが、わかりやすいということである。Bの「土地面積は日本の三分の一で人口は日本とほぼ一緒です」にも見られ、Cには「日本と一番近いところにある」「日本の気候とだいたい同じ」「人口は現在、日本の半分ぐらい」がある。

Dは、面積、人口、位置などについての具体的なデータが示されていない、歴史について何も述べてないのはおかしい、と他の中国人から批判的な意見があった。しかし、読み手を意識して、日本と違うことは何かという観点から主題を絞るのも、おもしろいアプローチであると教えた。国土の狭い日本と対照的に、広い中国では地方による違いがいろいろある。その中で、言葉、気候、料理の3点に限定して書いたのである。

このように、同じ「私の国」というトピックでも様々なアプローチがあることを知り、学生達の作文に対する視野が広がったと考えられる。

## 7. おわりに

トピックへのアプローチの違いは、実は均質な学生から成るクラスでも指導することができる。しかし、11カ国の学生がいれば、国情が異なることによって選ぶ主題が自ずから変わってくる。あるいは、国により作文教育やレトリックが違うという要因もあるのかもしれない。いずれにせよ、混

成クラスの大変さを逆手に取れば、このような作文教育ができるという実践例である。

最後に、この授業が狙いどおりに進んだのは、学生達の積極性にあったことも指摘しておかなければならない。彼らは、作文の表現にも外国の事情にも興味が旺盛であり、活発に質問して互いに議論した。国が違えば事情が変わることを知って驚いたこともあった。また、違う国に生まれ育っても同じ人生観を持っていることが分かり、感動したこともあった。

以上のように、作文教育は単に書かせて添削して返却するだけではなく、他の学生の作文から学ばせることが重要である。作文に限らず他の技能の教育でも同様であるが、学生間の相乗効果があることこそが、個人授業とクラス授業の違いである。

#### 参考文献

- 西谷まり (1994) 「ミニ・ディベートと作文の合体授業の試み」国際学友会日本語学校紀要『紀要』50-62  
椎名和男 (1997) 「国外の日本語教育をめぐる状況と展望」日本語教育学会誌『日本教育』94, 23-32  
吉村弓子・英矩久子 (1990) 「豊橋技術科学大学における日本語教育の変遷」豊橋技術科学大学人文社会工學系紀要『雲雀野』12, 49-63.  
吉村弓子 (1991) 「豊橋技術科学大学の日本語教育」日本国際教育協会編『留学交流』3-1, 10-11.